



薩摩藩英国留学生記念館
開館 10 周年記念

「旅立ちの地」エッセイコンテスト

準大賞

薩摩藩英国留学生記念館館長賞

フィリピンで見た世界

菅野 ころろ 兵庫県

私にとって、初めての一人旅は昨年のフィリピンへの語学留学であった。この経験は、人生における大きな「旅立ち」となった。新しい環境や文化に飛び込むことへの不安と期待が入り混じった気持ちで日本を後にした日のことを、今でも鮮明に覚えている。

フィリピンに到着すると、まず目に飛び込んできたのは日本とは全く異なる風景であった。蒸し暑い空気、活気に満ちた町の喧騒、そしてその中で行き交う人々の表情。すべてが新鮮で、同時に少しだけ恐怖を感じたことを覚えている。しかし、新しい言葉を学び、異文化に触れることへの好奇心が私を突き動かし、一ヶ月の留学生活がスタートした。

語学学校での授業は、初めのうちは難しく感じた。英語が思うように話せない自分に苛立ち、クラスメイトや先生ともうまくコミュニケーションが取れない日々が続いた。それでも、少しずつ

英語での会話が楽しめるようになり、自分の成長を感じることができるようになっていった。先生たちとも打ち解け始め、学校での生活は徐々に充実したものになっていった。

そんな中、私の心に強く刻まれた出来事があった。ある日、コンビニの帰り道、ふと足元に小さな手が伸びてきた。振り返ると、そこには五歳くらいの男の子が私を見上げていた。薄汚れた服に痩せた体、無邪気な笑顔を浮かべながら、彼は私にお金を要求してきた。私は突然のことに驚き、言葉が出なかった。少しの間、彼と目を合わせた後、私は何も言わずにその場を立ち去った。

その後も、同じような光景を何度か目にした。路上で生活する子どもたちが、観光客や地元の人々にお金や食べ物を求めている姿。彼らは笑顔で手を差し伸べてくるが、その笑顔の裏には、私がかつて触れることのなかった厳しい現実が隠されていることに気づかされた。彼らが生きる世界は、私が育った日本とは全く異なるものであった。それまで貧困というものを頭で理解しているつもりであったが、実際に目の当たりにしたとき、その現実の重さに圧倒された。

フィリピンでの語学留学は、単なる言語を学ぶための旅ではなく、未知の世界を知るための「旅立ち」であったと感じている。語学学校での勉強や先生との交流ももちろん貴重な経験であったが、街中で出会ったストリートチルドレンたちとの短

い瞬間こそが、私の心に深く刻まれた出来事であった。彼らの姿を通じて、世界にはまだ知らない現実がたくさんあることを痛感した。

日本での生活では、貧困やストリートチルドレンの存在を実感することは少ないかもしれない。しかし、世界には自分の知らない世界が無数に存在し、その一つ一つが、それぞれの人々の人生を形作っている。フィリピンでの経験を通じて、異なる現実を知り、それに対してどう向き合うかを考えるきっかけを得た。

フィリピンでの旅立ちを通じて、私は成長した。それは単に英語力の向上だけではなく、世界を広い視点で見る力、そして他者の現実に対して共感し、理解しようとする姿勢を得たという意味での成長である。薩摩スチューデントたちが英国への旅立ちを通じて異なる文化や価値観に触れ、日本に新しい風を吹き込んだように、私もまた、フィリピンでの経験を通じて自分自身の中に新しい視点を育てることができた。

旅立ちとは、未知への挑戦であり、自分を変えるための一歩である。その一歩を踏み出すことには、勇気が必要である。しかし、その勇気が新しい世界への扉を開き、私たちをより豊かな人間にしてくれる。私もこれから先、新たな旅立ちに挑戦し続け、さらに多くの未知の世界を知り、自分を成長させていきたい。